

ベルクソンの美学の試み (3)

原 章 二

XI 知的直観としての動的図式

ここでいう知的直観はカントの「知性的直観」、すなわち主観における一切の多様なものが自発的に与えられ、直観の対象の現実的存在そのものを認識する根源的直観¹⁾のことではない。カントによればそのような直観は根源的存在者〔神〕にのみ帰せられ得るものであり、人間のように客観の現実的存在に依存・依属して存在する者には不可能なのであった。だがすでに見たように、ベルクソニズムはそれを可能とする²⁾。實在の本質を時間的なもの、「持続」とすることにより、主客は空間的な対立項ではなく、「持続」の収縮度の差による区別となった³⁾。「持続」の収縮作用によってわれわれは対象の内部に参入し、対象をそれであらしめているもの、その対象を生み出した力と一致する。つまり直観による認識とは、「空間」の外的差異を「時間」の内的差異で置換することによって、対象を自己と共通の根源で捉え、それを内側から全体的に理解することなのだといってよい。

1) カント『純粋理性批判』、「先験的感性論に対する一般注」IIを参照のこと。

2) カントの「知性的直観」についてのベルクソンの言及は、PM, 220 (C, 1427)。

3) MM, 73-74 (C, 217-218): 「宇宙をつぎつぎにとらえるわれわれの知覚がそれぞれ質を異にするのは、これらの知覚の各々が、それ自身持続のある厚みに占めてひろがっていること、記憶力がそこに莫大な数の震動を圧縮していて、これらは継起的であるにもかかわらず全部一緒にわれわれに現われることからくる。知覚から物質、主観から客観へ移るには、時間のこの不可分の厚みを観念的に分割し、好きなだけ多くの瞬間をそこに区別し、一言でいえば記憶力を全く取り除けばよい。(……) 知覚の主観的側面は記憶力の収縮からなるものであり、物質の客観的實在はこの知覚が内部的に分解して生ずる多数の継起的震動と一致する。(……) 主観と客観、その区別と統一に関する問題は、空間よりもむしろ時間の関数として提起されなくてはならない。」(傍点ベルクソン)。

言い換えれば、直観による認識とは個の拡大そのものである——唯我論とは全く反対の方向において。このような「共感」(sympathie)としての直観は、常にある「絶対」に触れている。そこには程度(degrés)があった。しかしその程度は高めることができる。ベルクソンにとって、カントの言う「知性的直観」は個としての人間存在に決して異質なものでない。生活への注意を転換し、「純粹持続」を目指すことによって、われわれは實在を生む力と一致し、新たな現実をそこに創り出し得るのである。さて、ここで扱われる知的直観はカントの「知性的直観」のように根源的なものではない。それは「持続の直観」の最も程度の低いものであり、むしろ「感性的直観」と言う方が正しいであろう⁴⁾。なぜそれを「知的」(intellectuel)と呼ぶのかといえば、それはこの直観が通常の知解作用(intellection)のなかに働くものだからだ。われわれはこの直観を解釈・理解という日常の知的活動において、それとは知らず実行している。知的直観が真の直観の低減したものだというのは、後に見るように、この直観が「絶対」ではなく「相対」に、「唯一無二のもの」ではなく「類似のもの」にかかわるからである。だがそれが直観であることに変わりはない。なぜならやがて見るように、われわれはそこにおいても「持続のなかで考える」⁵⁾のである。ところでこのような直観が万人のものであるなら、そこから出発して「俗人」と言えども「芸術家」の超-知的直観に近付くことは可能であるだろう。われわれは

4) Cf. PM, 258 (C, 1454)。

5) 直観の基礎的な意味はそれだとベルクソンは言う。PM, 30 (C, 1275)。

そのような直観として「動的図式」(schéma dynamique)を考えるのであるが。

「動的図式」についてベルクソンが語るのは、1902年、すなわち『物質と記憶』から6年後に書かれた小論文『知的努力』においてである⁶⁾。われわれは普通の知解作用において、例えば聞いたたり見たたりした言葉からその対応する観念へと進み、言葉は観念を直接的に呼び起こすと思っている。だがベルクソンによれば、事の真相は全く異なるのである。もし本当に言葉から観念へと進むならば、そこに起こるのは絶え間なき混乱、ひっきりなしの紛糾であろう。なぜなら文のなかの個々の語は決して絶対的な意味を持っていない。それゆえ言葉から内容を確定しようとするかぎり、ひとつひとつの語の持ち得るすべての意味を検討しなくてはならないだろう。そのような検討の終了することがあるだろうか。いやその必要はない、単語は前後関係により十分限定されている、というだろうか。だがその前と後を限定するものは何か。問題は言い換えれば次のようなものだ。すべての単語が独立したイメージや観念を喚起し得る訳ではなく、多くの単語は全体におけるそれぞれの位置によってある関係を表わすのみだ。それゆえ言葉から意味へ進むかぎり、われわれは意味を得るのに、すべてが終了し、全体が現われ出るのを待たねばならない。われわれは待つだろうか。いや一体すべてはいつ完結するのだろうか。個々の文は決して絶対的な意味を持っていない。そして以下同様である。すなわち、このように下位単位から上位へと向かうかぎり、意味を具体的に確定することは限りなく延期されるであろう。われわれはすべてが与えられるのを待つことはできない。一体われわれは普通にものを読んでいるときに、ほんのいくつかの単語、いや多くの場合単語すら読むことなく、若干の文字、その特徴的な字画をとらえるだけで、ひとつの文章の意味が分かってしまう、ということがないだろうか。もし本当に言葉から観念へと進むならば、どうしてこのように記号 (signe)

のほんの一部でもって、意味されているもの (signifié) の全体を捉えることができるのだろうか。記号は意味されるものの構成部分ではない。記号をいくら集めたところで、それだけでは意味の総体を回復することはいかにしてもできない。それゆえ知解作用を理解するには、全く逆に考えねばならない。すなわち、われわれが記号に意味を与えるのであり、われわれは言葉から観念へではなく、観念から言葉へと進む(否、精確には後に見るように意味から意味へと言葉を介して進む)のであり、全体はものの中にではなくわれわれの内部にある、と。

ベルクソンによれば、あらゆる精神活動において鍵となるのは、求心流よりも遠心流、導入よりも導出である。注意深い知覚を調べたとき、われわれはすでにそれを見た。知覚は記憶の射出によりなされるのであった。外部から与えられたもの、すなわちなまの知覚は完全なものではない。なまの知覚のみを足し合せて、完成した具体的な知覚を得ようと望むのは、いわば停止点を集めて運動を合成しようとするようなものだ。知解作用においても事情は全く同様である。聞くにせよ、読むにせよ、ベルクソンによれば知解作用とは、なまの知覚の助けを借り、記憶でもって意味を再構築することなのだ。その際なまの知覚の役割は、知覚しようとするもの全体への仮説を図式的な表象として喚起することだ。ベルクソンが「動的図式」と名付けるのはこの図式的表象のことである。全体の枠組としてのこの抽象的な「図式」は記憶を呼びよせ、イメージに展開される。それら記憶のイメージ〔記憶心像〕(images-souvenirs) をわれわれは知覚したイメージ (images perçues) に接触させ、それに重ね合せようとする。二つのイメージが一致したとき、知覚は完全に解釈されたことになる。言い換えれば、われわれはまず仮説的な意味を抱いて対象としての言葉に向かい、内心の想定された言葉をそれに重ね合わせる。重ね合せが成功したとき、われわれは対象としての言葉を生み出した意味に出会う。言葉から観念へではなく、観念から観念へ言葉を介

6) ES, 153-190 (C, 930-959).

して、である。このような過程は無論ふつうは意識されない。意識される必要もない。だが聞き違い、読み違えたとき、われわれがいかにもすでに考えた意味をたずさえて言葉に向かって行くか、がよく分かるはずだ。その何よりも良い例証は、外国語で会話している時であろう。これは先入主云々という次元の話ではない。知解作用の構造そのものが、このような一種のア・プリオリの存在を必要とするのである。記憶のイメージが対象に重ならない場合、われわれは最初より出直して、別の図式的表象に移らなければならない。いくら文字を眺め、音声を繰り返し聞いたところで、その次元にとどまるかぎり、それだけでは何もならない。このような「動的図式」の存在事実は疑われないが、それはまたペルクソンの知覚と記憶の理論そのものにおいても必然的に要請されるのである。『物質と記憶』に従って通常の注意深い知覚について見たとき、われわれはあたかも記憶が直接的になまの知覚の方へ出会いに飛んでいくかのように述べた。だが『物質と記憶』においても、「動的図式」ほど主導性を持たされておらず、またなによりもまず身体的なものではあるが、すでに「われわれの知的作業の調子を整える」ものとしての「運動的図式」(schème moteur)についての言及がなされている⁷⁾。『知的努力』においてそのような図式が正面切って取り上げられ、機械的な注意とは異なる、意志的な、努力感を伴うあらゆる注意において、「動的図式」が必要とされている。実際それなくして、どうして記憶はなまの知覚に接合するだろうか。先に見たように、記憶と知覚とは現在に析出したのち、互いに分かれ、離れ去っていく、本質的に相反する二つの異なった流れなのだ。両者の乖離は、それぞれが純化すればするほど著しい。なまの知覚は対象の一部であり、物理的存在である。それは人間的知覚としては不完全だが、しかしそれ自体は自足している。一方純粹記憶は通常の実際的な生活から切り離されて凝固し

無力であり、いわば鏡の中の像であった。鏡像が鏡像のまま現実界に出て、対象に直接重なり合うことは不可能だ。実際その不可能を実現しようとして、いままでどんなにさまざまな、だが結局はあるいくつかのパターンに落ち着く試みが詩人たちによってなされて来たことか。記憶となまの知覚の接合が、ただ対象の再認という段階にとどまるならば、事はまだ容易であろう。対象とその像は元々同一のものだったのだ。しかし注意深い知覚の場合、対象に送り返されるのは対象の記憶像ばかりではない。知覚を深め、広げるには、対象に関連した他の記憶像が必要なのだ。このことは仕事のある意味で容易にし、いつもの道へ導くものとなる。確かに知覚が注意により深化拡大することはある。しかし実際われわれの経験するのは、多くの場合知覚の単なる概念化か、もしくは知覚をダシにした空想にすぎない。対象の単なる再現像ではない記憶が直接的に知覚に接合するのは、次の二つの可能性しかなかろう。ひとつは夢において、もうひとつは機械的な知覚において。夢において、われわれは先に述べた「心理的現在」から身を退けている。それゆえ知覚を行動に役立てる必要はない。そのとき現在で記憶と分かれた知覚は行動の方へ飛んでいかない。行動目標を失った知覚は、記憶の世界へ入って行くしかない。そのとき一方で記憶はこの異質な闖入者に惹かれて、我れ勝ちに合体しに行き、他方有用性を失った知覚は、無用な記憶に惜し気もなく活力を供給するであろう。自由奔放な夢が織りなされる次第となる⁸⁾。機械的知覚においては、逆に記憶の方が自動的に物質化される。機械的注意とはひとつの習慣であり、そこにおいて記憶は既成のメカニズムにいささかの逡巡も許されずのせられて行く。別言すれば、そこにおいては身体が原初的な「動的図式」の役をなしているといえよう⁹⁾。さて知的努力を要する知解作用はといえば、それは夢のように「心理的現在」から脱却してもいず、さりとて

7) MM, 135 (C, 266). MM, 121 (C, 255) et suiv. も参照のこと。これについては後にまた触れるであろう。

8) ES, 85-109 (C, 878-897). 『夢』を参照のこと。

9) Cf. MM, 100 (C, 238).

機械的注意におけるような対象への一次的反射でもない。確かにそれは既成の一般的メカニズム、すなわち言語を下地とするが、そのメカニズムの作動自体——メカニズムはしばしばそれを自己目的とする——が問題なのではなく、その共同のメカニズムを通じて、異質の他者を理解することが問題なのだ。ここにおいて、すなわち想像ではなく現実の空間において、一体いかにして記憶はなまの知覚に、言い換えれば自我は他我に直接に結びつくことができるだろうか。その両者を結ぶ第三項が必然的に要請される。その中間項こそが「動的図式」なのである。

「動的図式」は一般的・抽象的中間項ではない。それを知解作用の単なる潤滑油、形式的な仲介者と見ることは、その独特の性格を見落すものだ。確かに「図式」は抽象的な表象であるが、その抽象性は概念の持つ抽象性とは全く相容れない。なぜなら「図式」は決して概念のようにいくつもの異なるイメージ群を引き連れることはできないからだ。それは常にベルクソン言うところの「あつらえた」(sur mesure)ものである。それは「図式」が常に個々のなまの知覚によって決定されるからだろうか。だがなまの知覚は「図式」を「暗示する」(suggérer)のであって、「生み出す」(engendrer)のではない¹⁰⁾。言い換えればその両者の関係は限定—被限定のそれではなく、ベルクソンが『物質と記憶』のなかで明らかにしたところの、脳と思考との間に見られるごとき関係である。思考はあらゆる瞬間にあらゆる方向に脳をのり越え、あふれ出すものとしてある¹¹⁾。「図式」も同様だ。われわれが言葉の意味を豊かにし得ること、言葉に新しい意味を与え得ることは、その証左であろう。そして究極的に言えば、「図式」の発

生とその存在は、なまの知覚の側からの呼びかけ、うながしよりも、われわれの側の努力の意志により多く依属する。なぜなら「図式」はなまの知覚なしにも存在し得るからだ。それは知的努力のもっとも高度な形、「発明」(invention)の努力の場合である。発明においてまず現われるのは、ある不可分な全体の図式的表象、すなわち実現しようとする結果の表象である。その表象はおそらくその時まだ精確なものではないが、しかしすでに独特な(sui generis)ものであり、発明家の行手を明らかにする。その抽象的な「図式」を具体的なイメージに展開すること、発明の努力はひとえにそこにかかる。いや、とひとは言うだろうか、発明もひとつの建設であるゆえ、まず部品を集めることからはじめなくてはならない。そして手探りの実験のはてに、得られるべき結果を明確に把握するに至るのだ、と。だが、先在、より精確には潜在する全体の表象なくして、どうして部品があり得よう。またどうして手探りができよう。とはいえ全体の図式的表象ということから、「図式」を何か固定したもの、部分を集めて組み立てるための不変の設計図のようなものとするのは誤りである。「図式」はそれを満たすべき記憶のイメージに対して外的なものではない。それはまた、なまの知覚と記憶のイメージの間の単なる中間項、その両者から中立のアノニムな仲介者でもない。「図式」は特定の記憶のみを呼び集め、そのことによっておのれ自身がイメージに変容する。「図式」とは「記憶のエキス」(concentré de mémoire)であり¹²⁾、さまざまな動的な要素が互いに含み合って、展開を待望している生命の胚種なのだ¹³⁾。そして「図式」は自ら変化しつつ、要素となる記憶を変化させる。記憶の変化とは、それが記憶のイメージとなって図式にはまりこむ過程において、記憶相互間の関係を変化させることをいう。発明は既知のものの単なる空間的な組み替えでは

10) ES, 173 (C, 946).

11) 詳しくは『物質と記憶』第二章、第三章参照のこと。『心と体』と題された1912年の講演において、ベルクソンは巧みな比喻で脳と思考の関係を次のように表わしている。いわく「衣服をかける釘とそこにかけてある服」の関係、「額縁とそのなかの絵」の関係、「オーケストラの指揮棒とそれに応ずるシンフォニー」の関係云々。Cf. ES, 29-50 (C, 836-852).

12) Vl. Jankélévitch, *Henri Bergson*, P. U. F., 1959, p. 113.

13) ES, 164, 190 (C, 934, 959).

なく、それらの間に全く新しい有機的な関係をつくり出すことによって、新たな存在を生み出す。このことはもっと卑近な例、ペルクソンのあげるワルツの習得のような新しい身体動作を学ぶ例からも理解できよう。既得の身体動作をもって、目で見た教師のワルツを合成しようとするのは、ワルツが踊れないときにワルツの動きを精確に知覚できると思うものだ、とペルクソンは言う¹⁴⁾。知覚の精度は模倣(可能性)の精度に比例する。ワルツは全く新しいひとつのフォームであり、それゆえ既得の身体動作間の全く新しい関係を要求する。歩く習慣は踊りを妨げる。ワルツを習う生徒は、新しい運動全体の図式的表象を、個々の既得の動作で展開するのだが、それにはワルツのなかに見出される要素と類似の既得の動作を、新しい運動の方向に曲げ、変化させ、新しく組み合わせてワルツ独自の相互関係をつくり出さねばならないのだ。さてもう一方の「図式」自体の変化とは、イメージへの展開を得る過程において、「図式」そのものがしばしば変更を余儀なくされることをいう。実現しつつあるイメージが「図式」に反作用するのだ。そこに予測できない新しいものの生まれる余地がある。「図式」は不動ではない。それはイメージに表わされるために、この反作用による変化を受け入れなくてはならない。そしてイメージが完全に実現したとき、「図式」は消えている。

記憶からイメージへ、一体この「動的図式」は何をなしたのか。この両項はどちらも静的なものだ。「図式」を記憶のイメージとなって満たしていく元の記憶、すなわち純粹記憶は、すでに見たように、それ自体には最早生成ということのない完結したものだ。一方記憶のイメージがなまの知覚に合致したとき生まれる具体的なイメージは、そこで安定する。「図式」はこの両項の間に現われ、われわれを運動のなかに投ずる。「図式」が消え、イメージが現われると、すべてがまた静止する。精神が働き、知解作用がなされるのは、「図式」が現われて

いる間である。このような次第ならば、どうして次のように言っていけないだろうか。「図式」はわれわれを「持続」のなかに投ずるのであり、「図式」の経験とは「持続の直観」のひとつである、と。「図式」は純粹記憶を呼び集め、それらに変容を起こさせる。それはまさしく「持続」を生む行為ではなかったか。われわれは先に、「直観」とは知覚と記憶の共通の源泉である「持続」を目がける精神の努力だということを見た。「直観」において知覚と記憶は合一する。ところで「図式」もまた、限定されたやり方ではあるが、その両者を仲介する。限定された、と言うのは、そこにおいて記憶と知覚は同一のものとしては現われず、また同一性の根源に進む必要もないからだ。ふつうの知解作用において、読むにせよ聞くにせよ、なまの知覚、すなわち対象の言葉の知覚によって触発される「図式」は、当の対象の言葉を生み出したところの、向う側にある他者の「図式」と同一のものではない。「図式」はデウス・エクス・マキナではない。それは記憶が生み出すものであり、「記憶の精」であった。ところで記憶の世界を形づくる純粹記憶には、同じものは二つとない。われわれはお互い全く独自の純粹記憶をかかえているのだ。純粹記憶は刻々殖え、その堆積に応じて記憶界は変容をつづける。とすれば個の立場よりするかぎり、全く同一の「図式」はまず存在しないであろう。それゆえふつうの知解作用においてわれわれの持つのは、対象としての言葉を生み出した他者の「図式」に類似したものだけだ。「図式」はなまの知覚に対する「仮説」であり、なまの知覚を分析し、解釈するには、必ずしも同一の「図式」を持つ必要はない。新しい「図式」によって生み出された対象は、われわれの記憶界の全面的な変容を迫ろうが、われわれは手持ちの純粹記憶の新しい組織化で応じ得る範囲でしか「図式」を持つことはできない。だがそれは、全く異なった「図式」で対応しようとする「誤解」ではない。同一のなまの知覚に対し、それを解釈するいくつかの似た「図式」が可能であろう。「類

14) ES, 178 (C, 950).

似の図式」——それでいいのだ。まず精神が動くこと、「類似」（とはすでに運動の概念ではないか）のなかで働き始めること、それは「考える」ことより以前の根源的作用なのだ。「類似」とは個の仕切り、固化した既成の枠から出ることだ。それは対象の「模倣」を引き出し、個我のひろがりを生む。知解作用における直観としての「図式」は、確かに「相對」の領域にとどまるが、それゆえにこそまた知解作用は固化した「絶対」の持ち得ない柔軟性、伸展性を持ち得るのである。このように「図式」はかなり限定的なものであるが、「直観」と呼ぶことができよう。「図式」の命は束の間のものであり、その存在は意識化されることは少ないが、われわれは「図式」の生み出す瞬間的な「持続」の連続によってのみ、読んだり、聞いたりしているのだ。「純粹持続の直観」が不可解な、承認できないものとするなら、他人を理解することもまた同様なものだ、と言わなければならない。さて話を元に戻せば、われわれがすでにこのような「知的直観」を手に行っているならば、どうしてそれを手掛りにして「持続の直観」によって拡張された美的知覚を土台とする「芸術」を理解、いや知覚できないことがあろうか。「知的直観」としての「図式」は確かに本来の直観より段階の低いものであろう。しかし「図式」は本質的に「開いて」いるのである¹⁵⁾。イメージは完結され、閉され、われわれはそこに参画できず、ただ対面するのみで、それが気に入らぬ場合、取り換えるだけだ。だが「図式」は成長し、変容する。それはわれわれを「持続」のなかに投げ入れる。われわれはそこで「個」の空間的な仕切りから解放され、他者との共同の経験へと向かうことができよう。「生の自由な交通」(libre circulation de la vie)がそこに始まる¹⁶⁾。ある創造、ある自己超越がそこでは可能であろう。先にわれわれは、「類似の図式」しか持てないと言った。個々の純粹記憶は異な

る。しかしそれらの抽象的綜合としての「図式」の構造は、対象を生み出した「図式」のそれに限りなく接近させ得る。そのときどうしてベルクソンの述べるように、「言葉を横切って動く意味以外何もなくなり、一つになって仲介なく直接に振動し、共鳴するように見える二つの精神以外何もなくなる」¹⁷⁾ことが起こらないと言えよう。こうして「知的直観」としての「図式」の助けを借りて、われわれが芸術創造者の「超-知的なもの」に限りなく上昇していくことは可能とされるのである。

*

ところで知解作用とは、情報理論でいうところの《デコダージュ》のことではないか。とすれば「動的図式」はコードとメッセージに対し、どこに、どのように位置づけられるのだろうか。この問いは、「動的図式」の出自とベルクソニスムの根本的な性格さらに明らかにするうえで有用であるように思われる。コードを通例受け取られているように、辞書と文法を合わせたようなもの、語る主体から切り離されて、それ自体アノニムでニュートラルな自律体と解する限り、それはベルクソンにとって、知解作用にほとんど無縁なものとされることは、先の「動的図式」の理論から間違いないところであろう。そのようなコードは死した抽象であり、メッセージがそれによって実際理解されると考えるのは、固定を愛する空間的知性の、事後における《説明》にすぎない。われわれはコードに従って理解するのではない。コードは生成されたものであり、生成するものではない。そのことはコードからの逸脱、コード違反、また新しい比喻の成立を考えて見ればよいだろう。なぜコードを破っても実質ある、いやしばしばより手ごたえある意味が伝達され得るのだろうか。それをコードからの偏差の多少という抽象的次元で捉えることは、主体の表現行為、意味生産への参加の方向を全く逆にとるものであり、ちょうど交通法規違反の場合のように、意味は罰金の重みということになってしまう。コード

15) ES, 187-188 (C, 957).

16) 「ボンサンスと古典教育」1895年7月30日, EP, I, 90 (M, 368).

17) ES, 46 (C, 850).

は確かに存在する。しかしわれわれはそれを利用するのであり(利用は制約と表裏をなす)、道具は対象の形に型どられてはいない。だがコードによってはじめてメッセージが存在し、また完全に解読される例もあるではないか、と反論もあろう。手旗信号、モールス信号、暗号。だがそれらの《コダージュ》と《デコダージュ》は抽象され、局限された場におけるものだ。というのは、それらはすでに言語を前提としている。コードによる《コダージュ》と《デコダージュ》は、根源的な知解作用ではない。それでは一体言語とは何か。コードを上のようなものとする限り、それとは別様にラングというものを考えねばならないことは確かである。

ベルクソンによれば、ラングとは動くもので、決して安定したものではない。ベルクソンはそのことを《類似の知覚に基づく一般概念》(idée générale)の起源と構造について論じる際明らかにする。

「一般概念の問題をめぐる生ずる心理学上の困難をできるだけせんじつめてみると、それは結局つぎのような循環論法を出ないように思われる。すなわち、一般化するためにはまず抽象しなければならないが、有効な抽象をするためにはすでに一般化することができなければならない、ということだ。唯名論と概念論は、意識的にせよ無意識的にせよ、この循環論のまわりを堂々めぐりしているのだ。」¹⁸⁾

ベルクソンはこのジレンマの根底に共通の要請のあることを指摘する。それは両者がいずれも「個体の知覚」から出発することを仮定していることだ。唯名論は個体の枚挙により、概念論は個体の分析により、類の概念を作り上げる。だがベルクソンによれば「われわれは個体の知覚からもまた類の概念からも出発するのではなく、その中間的認識、すなわち特徴ある質または類似の漠然とした感じから出発する」¹⁹⁾のである。このことは事物に関するわれわれの知覚の全く功利的な起源を考えるならば明白である

う。知覚は可能的行動のデッサンだということを感じ起そう。生の要求するものはまず有益なものの弁別であり、個々の事物の副次的な差違には何の用もないのである。それゆえ「草食動物をひきつけるのは草一般である。力として感ぜられ蒙られる色や匂いだけが、その外的知覚の直接的な所与である。」²⁰⁾動物はその力に反応し、行動する、すなわちここでは草を食べる。この多様な状況における反応の同一性こそが、対象の類似の感情を生ぜしめるのだ。「表面的には異なった作用に対する同一の反作用、これが人間の意識において一般概念に発展するものの萌芽なのである。」²¹⁾この類似を浮き出たせるのは心理的な努力ではない。それは塩酸が石灰——大理石であろうと白亜であろうと——の炭酸塩にいつも同様に作用するのと同じように物理的な作用なのだ。神経系の役割を考えて見ればよい。多様な知覚器官がみな中枢を介して同じ運動器官に結ばれている。いったん出来上った運動機構はいつも同じ仕方で機能する。「だから知覚は、表面上の細部において、どんなに異なっていると考えてもさしつかえない。もし知覚に続いて運動反応が起こり、有機体がそこから同じ有益な効果を引き出し、知覚が身体に同じ態度を刻みつけるならば、何か共通のものがそこから出てくるのである。一般概念はこうして表象される前に感ぜられ、蒙むられるのである。」²²⁾このような「生きられ」、「自動的に演ぜられた」(joué)類似から、知的に認知、思考される類似への道こそ、一般概念の発生過程に他ならない。記憶力が介入して、類似のなかに差違を見出し、一方それに応じて悟性が、類似による習慣から一般性の観念を引き出す。言い換えれば「類」(genre)という一般概念が確立するのは、直接的所与であ漠然とした「類似」(ressemblance)のかたまりから「個体」(individu)が分離されるときなのである²³⁾。さてべ

20) MM, 177 (C, 299). 傍点ベルクソン.

21) MM, 178 (C, 300).

22) *ibid.*

23) これはすでに見た、記憶と知覚の同時形成の構造に対応する。

18) MM, 174 (C, 297).

19) MM, 176 (C, 298). 傍点ベルクソン.

ルクソンによれば、言語とは以上のような自然の過程が、悟性により反省され、意識的に模倣されて出来たものである。「いったんこの概念（＝類の一般概念）が構成されると、われわれはこんどは意図的に、無数の一般概念を構築したのだ。（……）悟性は自然の仕事を真似、自分もまた、こんどは人為的な運動機構を組み立て、無限に多様な個別的对象に対し、有限数の反応をさせるとだけ言っておこう。これらの機構の総体が、有節言語なのである。」²⁴⁾

さてこの機構は動くものであり、そこにこそ人間の言語の特性があるのである。知覚とそれに反応する行動のパターンの抽出から発生した一般概念は、何よりもまず生の要求に応えるものだ。そして一般概念の体系としての言語とは、社会生活の産物に他ならない。その構成員相互間でなんらかのしるしによってコミュニケーションの行われない社会を考えることは不可能だ。共同作業（action commune）が言語を必須のものとする。とすれば、昆虫（アリやミツバチ）の社会にも当然言語は存在するであろう。だがベルクソンによれば、そのような自然本能の言語と人間の言語の間には決定的な違いがある。前者において「記号（signe）は意味されたもの（chose signifiée）に固着している」²⁵⁾のに対し、後者においては「記号はひとつの対象から別の対象へと移動する傾向を特徴とする。」²⁶⁾なぜか。それは人間における行動が、本質的に可塑的なものであることによるのである。アリやミツバチの世界においては、「各個体はその果す機能に体構造上釘づけにされている。」²⁷⁾分業は自然のものであり、行動は固定している。人間社会においてはそのようなことはない。分業は人工のものであり、個人は常に新しい行動を習得しなくてはならない。言い換えれば、昆虫の社会では現実には自然によりすでに分節化さ

れて与えられており、行動の道具としての言語はその分節に従うだけなのに対し、人間の社会にあっては、現実はいわゆるわれわれの行動によって常に新たに分節化し直されていくのである。われわれの認識は動くものだ。言語はそれに応じなければならない。だが記号の数は有限なのである。とすれば当然記号は新しい行動によって現実から切り取られる無数の事物に拡張可能でなくてはならない。記号は対象に固着することなく、対象から対象へと動くものとなる。幼児の言語はこの点を典型的に示しているものといえよう。幼児の「現実」は大人におけるよりも流動的である。「わんわん」はそれを憶えたての幼児にあっては、犬でも猫でもまた人間ですら指し得る。だがこのような言語記号の非固着性、可動性はなぜ可能なのだろうか。人間の言語が一般性を帯びているのに対し、動物のそれは違う、ということから来るのではない。動物においても一般化は、類の知覚としてなされている。そうではなく、それは一言でいえば、本能の記号は対象にかかわる表象であるのに対し、悟性の生み出した言語記号は、対象とのかかわり合いの表象なのだ。われわれは「生きられた類似」を行動の領域から思想の領域に移す「習慣によって機械的に輪郭を示された類似から、この操作そのものについて成される反省の努力によって、類の一般概念へと移ったのである。」²⁸⁾概念（idée）とは、漠然と表象されたイマージュではなく、その「イマージュを表象するはたらきの表象」²⁹⁾なのである。事物の表象ではなく、関係の表象、ここにこそ言語記号の可動性の秘密はある³⁰⁾。「関係」は具体的な場から抽象されて、他の場へと転移し得る。そしてそれ

28) MM, 179 (C, 301). 傍点筆者。

29) EC, 160 (C, 630). 傍点筆者。

30) このことより分かるように、言語記号の表現面における恣意性——意味するものと意味されるものの紐帯が恣意的なものであり、その両者がなんら内的な関係を持たないこと——は、問題にされるまでもなく当然のことであり、それより根本的な事実言語記号の可動性を生むところの、「関係の表象」、「はたらきの表象」ということであり、またそれより重要な事実、すぐ下に見るように、その可動性によって生み出されるところの、「価値の恣意性」である。

24) MM, 179 (C, 301). 「有節言語」と訳したのは《parole articulée》である。これは以下に見るように、ラングとパロールの分離を拒否する言葉づかいと言えないだろうか。

25) EC, 159 (C, 629).

26) *ibid.*

27) EC, 158 (C, 629).

を要求するのが人間行動の可塑性に他ならない。人間の行動は常に新しい現実の像を生み出す。悟性による製作は、本能によるそれとは違い、形を変え得る。人間の行動が創造と呼ばれ得る所以だ。言語記号の可動性はそれに応ずるのである。そしてこの記号の可動性は、記号体系自体の内部にひとつの変化を惹き起こす。記号が無数の事物に拡張されるとすれば、記号相互間の関係は可変にならざるを得ない。人間言語の特性とされる《価値の恣意性》である。フランス語の mouton の価値は英語の sheep の価値とは異なる。sheep と mutton の対立は mouton にはないからだ。さて記号自体の可動性と記号相互間の関係の可変性は、人間の言語に固有の運動を生み出す。言語の《メタランガージュ》化である。具体的に言えば、それは mouton が sheep と mutton によって《語られる》ということである。一般概念を構築するはたらきは止むことがない。新しい「個体」の認識・抽出により、従来の「類」は変更を余儀なくされる。従来の「類」の概念はその可動性により新たな「個体」をおおいに行き、そして概念相互間の関係の可変性により、新しい概念作用をなす。mouton が mutton と sheep によって《語られる》とは、「羊」に対する新しい概念作用なしにはあり得ない、ということだ。そしてその背後には、人間の行動の変化が読みとられる。われわれは現実の新たな切り抜きにより、新しい一般概念を既成のその上に、あるいはまた、既成の一般概念のおおうもの相互の内部から別の新たな一般性を抽出し得るのだ。一般概念は他の一般概念により語られる可能性を常に持っている。これはすなわち、《メタランガージュ》への方向こそ、一般概念の体系、言語の本来的なものだ、ということである³¹⁾。

ところで言語にはもうひとつ別の方向から力が働く。有効な行動のため常によりよい抽象を

しようとして、言語は必ず《メタランガージュ》化すると言った。だが行動のためには対象を明確に掴むことが必要だ。行動の道具としての言語は、水準はさまざまにするにせよ、常に対象を表示しなくてはならない。すなわち《デノタシオン》である。ところが、本質的に《メタランガージュ》化する一般概念は、いかなる場、いかなる方向へも拡張できるものだ。それはノッペラボーの単なる外皮となる危険を常に伴う。そのときおわれたものは、「おわれた」という意味しか持たなくなってしまう。このような内的矛盾をかかえた一般概念は、それ自体では「不安定で消えやすい表象」³²⁾を形づくらすを得ない。例えば「美しさ」または更に限定して「花の美しさ」は、いかなる表象をわれわれに喚起するだろうか。概念とは、イマージュの表象ではなく、イマージュを表象するはたらきの表象であった。しかしそれが実際に働くには、すなわち「生きた言葉」となって対象を捉えるには、そのはたらきの表象は、自らが表象したはたらきによってイマージュの表象と化し、そのイマージュを安定させなければならない。その安定剤こそ、個々の記憶像である。概念「花の美しさ」は、個々の「美しい花」の思い出なくしてはなんの力もない。「一般概念は思い出された多数のイマージュの、少なくとも潜在的な表象を前提とする。」³³⁾ここにおいて、「生きられた類似」から分離した「類」と「個体」は、再び出会わなくてはならない。だが再会は反覆ではない。われわれの経験は進展をやめず、記憶は絶え間なく生成される。各人の記憶界はそれぞれ独特なものだ。それは既存の過去——言い換えれば社会の成員に共通の過去——の記憶のイマージュによって支えられている一般概念を、常にはみ出さずにはいない。つまりこう言えるだろう。言語は有効に作用するとき言語をこわす、と。記憶は一般概念のなかに入り込

31) バルトは新しい科学はそのそれぞれが新たな《メタランガージュ》だと言う。言い換えれば、それは科学が本来の要求の延長上に常に位置付けられる、ということだろう。R. Barthes, *Elément de sémiologie*, IV, 4 参照のこと。

32) MM, 180 (C, 301).

33) MM, 173 (C, 296).

34) マルチネによれば《コノタシオン》とは、ある言葉の使用において、その言語におけるその言葉の全使用者共通の経験には属していないもの、である。G. Mounin,

むことにより、一般概念を否定なしに変質させる。言語学でいう《コノタシオン》である³⁴⁾。

《コノタシオン》は言語活動における余分なものではない。それは常時発生しており、《デノタシオン》は《コノタシオン》を伴わずにはいないのである。それは、一般概念の機構である言語が、有限個の記号を持って無限の事物に対することより、必然である。

ここにあって、言語は《メタランガージュ》と《コノタシオン》というふたつの作用によって理解されることは明らかであろう。「言葉」は、絶えずより一般化し、より有効な行動の可能性を目指す「概念」と、絶えずより独自の世界を築こうとする「記憶」の交叉より生まれる。逆に言えば、一般概念の体系としての「言語」は、「絶え間なく行動の領域と純粹記憶のそれとの間を動く」のである³⁵⁾。ここに見られるのは、言語活動をラングとパロールという切り離されたもののディアレクテックと見ることの拒否である。ベルクソンは言うであろう、それは「事物のみを知り、進行を知らぬ」言語学であると³⁶⁾。ところで《メタランガージュ》と《コノタシオン》は本来相反する二方向である。言い換えれば「言葉」は創造と同時に崩壊の危険にさらされている。《メタランガージュ》と《コノタシオン》が乖離することなく、交叉して「言葉」を生みにつづけることができるのはなぜだろうか。当然の疑問である。実際、一般概念はしばしば誤解の、そして内容のない夢想の手段と化する。だがそれにもかかわらず、われわれが言語を用いて理解を続けていることは事実だ。「概念」から生きた「言葉」へ……その転生の秘密は何か。しかしわれわれはこの問いへの答をすでに手中にしているのである。「動的図式」——それは「類似」にかかわる直観であった。

34) *Clefs pour la linguistique*, Ed. Seghers, p. 188 参照。この定義は本質的なものと言えるだろうか。《コノタシオン》はいわゆる「言外の意味」とされるが、ベルクソンに則るならば、それは「言の意味」そのものであり、ただ「一般概念外の意味」とであると言えるだけだ。

35) MM, 180 (C, 301)。

36) MM, 180 (C, 302)。傍点ベルクソン。

そしてそれはまた、記憶と行動とをつなぐものであった。一般概念の起源を思い起こそう。それはまず「生きられた類似」であった。そしてその本質はやはり上の両者の間を動くことにあるのだ。すなわち、「動的図式」こそ、すでに出来上った言語機構のなかで、言語の発生を繰り返すものなのである。このように言語を発生状態に戻す力がわれわれの内部にあるゆえに、われわれはメッセージを解読できるのである。常に始源より繰り返すこと。個体発生は系統発生を繰り返す。本物の発生の仕方にはそれしかない。ここまでくれば、コードを破ってもメッセージが伝わるのはなぜかという問いは、正に転倒したものだということが分かる。《コダージュ》と《デコダージュ》は反対の流れではない³⁷⁾。意味を理解するには、意味を生むのと同じ過程を踏まなければならない。「動的図式」の役割はそこにある。それはわれわれの内部にある「原始」であり、いわばコードとメッセージを同時に生むのだ。ここでわれわれはレヴィ＝ストロースがベルクソンについて言った言葉を思い出さずにはいない。「書齋にいながら野生人のように思惟する哲学者。」³⁸⁾それはトーテミズムに対するベルクソンの考えについて言われたものだった。トーテミズムにおける氏族員とある動物種、またはある植物種との間の親縁関係を、ベルクソンは一般概念の起源において見られた「個体を通り越した類の直接の知覚」によって説明しようとした³⁹⁾。そしてそれはラドクリフ＝ブラウンが20年後に到達する結論と同じものを引き出したのだ⁴⁰⁾。ベルクソンが一般概念に関する唯名論と概念論の論争について行なったと同じことを、ラドクリフ＝ブラウンはトーテミズムに対して行なったと言える。レヴィ＝ストロースは書いている。「ラドクリ

37) 構造言語学との対立は指摘するまでもないと思われるが、cf. R. Jakobson, *Essais de linguistique générale*, Ed. de Minuit, Collection Points, pp. 93-94 (Linguistique et théorie de la communication)。

38) Cl. Lévi-Strauss, *Le totémisme aujourd'hui*, P. U. F., p. 146。

39) MR, 192 (C, 1130)。

40) Cf. Cl. Lévi-Strauss, *op. cit.*, pp. 137-140。

フ＝ブラウンの証明は、トーテミズムの反対者も擁護者も共に閉じこめられていたジレンマを決定的に取り除く。かれらは生物種に自然の刺激物か、あるいは勝手な口実というただ二つの役割しか与えていなかったのだから……。」⁴¹⁾ さてトーテミズムの奥に「類の直接知覚」がひそんでいるならば、われわれは逆に、レヴィ＝ス

トローズに倣って、「動的図式」はわれわれの「心の中のトーテミズム」(totémisme du dedans) だと言えないだろうか。「野生の思考」はわれわれの内部に住み、日々働いている。ベルクソンはそれを見抜く眼を持っていたにすぎないのではなかろうか。

(未完)

41) それはトーテミズム解釈をめぐる概念論と唯名論の争いであった。Cl. Lévi-Strauss, *op. cit.*, p. 132.